

---

**カギ**

**【呪われた血】**

みか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カギ 【呪われた血】

### 【Nコード】

N9463X

### 【作者名】

みか

### 【あらすじ】

桜舞う季節。

ここ、夢野坂中学校に2人の生徒がやって来た。

2人は同じ瞳・髪色をしている。

金色の髪に似合ったハワイアンブルーの瞳。

一卵性の双子。

姉の横田菜那。

弟の横田秀。

この横田姉弟が後々事を起こす。

不思議な力をもつ横田姉弟がある女子生徒の中にある力の封印を解く。

その先には一体どんな運命が待っているのだろうか。

それは、この物語を読み進めていくといつか辿りつくだろう。

ねえ、刹那。

私ね、誰にも言えない秘密事が出来ちゃった…（ノ―；）  
どうしよう

刹那、あなたにも言えないことなんだ

もしさ、刹那が私と同じならいいんだよ  
言えるんだよ…

でもさ、そんなことは絶対にないんだよ…

それでも刹那はずっと私となりになってくれる？

私も刹那のとなりにいるよ（＾・＾）

だからさ、刹那だけは私を見捨てたりしないで

恥ずかしいことなんだけどさ、私刹那がいないと何にもできない  
んだよ

知ってる？

私が夢野坂中学校に入れたのも、

ピアノを弾けるようになったのも、

楽譜が読めるようになったのも

すべて刹那のおかげなんだよ

だからさ、私を見捨てないで…！

私が

《ベヴァラ族》

の末裔だとしても…

？

春の夢野坂中学校は毎年のように華やかだ。

そう、今日は明日の入学式の準備の日。

進学したばかりの2・3年生で、花や椅子などの準備をしている。

広い体育館内は話し声や物音で溢れかえっている。

その中でもひととき大きな声で指示を飛ばしている女子生徒がいる。

彼女こそがこの物語の主人公だ。

黒髪で腰まであるストレートの髪をそのまま結ばずに床え垂れ流している。

手にはパイプイスの配置場所の紙を数枚もっている。

背は高くスラッとした姿勢で指示を飛ばしているのは、新生徒会長の

《安和見唯》

だ。

？

「唯、椅子が足りないよ」

大声で唯の名を呼んだのは椅子担当リーダーの

《鈴木美玲》。

美玲は唯と同じクラスの女子生徒。

クラスメイトというだけで、普段はあまり親しくはない。

「あー。足りないかー」

唯は美玲がいるステージ真下にあるパイプイス入れに近づいた。

「ま、その分今年の新入生が多いってことね」

と美玲が言くと、唯が「あっ」と何かを思い出したように声をあげた。

「視聴覚室……。視聴覚室にならまだたくさんあるかも」

「あ、じゃああたし見て来るは」

そう言いながら、美玲はパイプイス入れから這い上がって唯の前にたった。

「あ、でも。私も行くよ」

「ダメ！唯は生徒会長なんだから、持ち場を離れちゃだめだよ」

そう言くと、美玲は視聴覚室を目指して走って行った。

？

数分後、両脇に2つずつパイプイスを抱えて息を切らして美玲が帰ってきた。

「唯の言う通り、いっぱいあったわ」

唯は右手の親指を立てて、goodのサインをだした。

そして美玲は椅子担当の人たちの元へ行き、指示をだした。そのあとすぐ、何人かが体育館から駈け出して行った。

おそらく、視聴覚室へ椅子を取りに行ったのだろう。

準備を始めて1時間30分。

唯は手に持っているマイクを口に近付け、

『それでは、自分のところが終わった人から解散してください。おつかれさまでした。』

明日はもつと頑張りましょう』

そう唯が言い終わると生徒たちが次々と帰って行く。

「唯。あとどれくらいかかる？」

そう言つて唯に近づいたのは、同じクラスの

《山瀬晴海》。

晴海は唯と親しい友達。

晴海はブラウンの髪をしていて、耳にはピアスで腕にはバンゲル。おまけに制服はイジリまくり。

腰まである髪を高く結び上げてポニーテール。髪を結ぶものはやはり派手なシュシュ。

見た目は相当いかついが、悪さをせずきちんと授業を受けている。しかも、成績は上の中。

「あーわるい。何時になるかわかんないや…」

唯は自分の腕時計を見て謝った。

続けて、

「晴海はどうする？このまま帰る？」

晴海は唯に問いかけに少し考えて、

「うっしっ！あたし唯が終わるまで待っとくわ」

晴海はニカッと笑う。

「え！？大丈夫なの？まじで何時になるかわかんないよ？」

唯は少し慌てた様子だ。

「ガチで大丈夫だってば！まあ、出来るだけ早く終わらせて一緒に帰ろうね」

またニカッと笑う。

晴海は唯のように生徒会員ではないので、生徒会員のようには遅くまで作業する必要がないのだ。



？

あれからどのくらい時間が経っただろうか。

外はもう薄暗くなっていて、日も沈みかけている。

晴海はそんな空を昇降口で眺めている。

「まだかなあ」

これで何回目だろうか。

そんな事を口にするのは。

そんな時、廊下の方から小さな上履きの足音が聞えてきた。

靴箱の陰から姿を現したのは唯だった。

その姿をみて晴海の様子がパッと明るくなった。

「唯！」

今にも飛びつくかのような体勢だ。

「ごめん。すつごく、待たせました？ 思ってた以上に長引いちゃつて…」

唯は上履きから下履きへ履き替える。

「いいよ。そんなの」

晴海は忙しく胸の前で手を振る。

「そういえば、おばさんに連絡した？」

唯は下履きに履き替え、晴海に『行こ』と合図した。

「あー一応電話したけど出なかつたからメールしといた。

「そっかー、ならよかつた」

唯が背伸びをした時、ケータイの着信音が鳴った。

どうやら晴海のケータイらしい。

「あ、お母さんからだ。ちょっとわるい」

一言言つと電話にでた。

「あーもしもし。

今から帰るところだよ。

わかってるって。

うん。

じゃあね」

電話を切り、ケータイをカバンの中へ入れた。

「おばさんなんだって？」

「んーまあ。『今どこにおんの？』とか『気いつけて帰りさいよ』とかだよ」

それから2人は正門を抜け、帰り道を歩いていた。

「ねえ、今年の新生入って何人入ってくるの？」

「んー。300人くらいだったかな？」

ふとそこで2人は黙った。

2人に緊張が走る。

2人は小声で、

「唯、気づいてる？」

「うん。校門抜けてからだよね？」

「とりあえず逃げよう」

だがもう遅かった

!!!!!!!!!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9463x/>

---

カギ 【呪われた血】

2011年10月28日06時13分発行